

プレイス・メイキングとしての歴史的・地域資産の保全・再生に関する考察*

A Study on Preservation of Historical Community Assets through Enhancement of Sense of Place*

角野憲次**・森下一男***・土井健司***・中西仁美****

By Kenji SUMINO**・Kazuo MORISHITA***・Kenji DOI***・Hitomi NAKANISHI****

1. はじめに

近年、地域資産の活用を重視したコミュニティ再生において、プレイス・メイキング(place making)が中心概念と位置づけられることが多い。これは、センス・オブ・プレイス(sense of place)を欠いた従来の空間づくりへの反省に立ち、人の交流や人と自然との交感を中心に据えた場所づくりを志向するものである¹⁾。

センス・オブ・プレイスとは、「特定の空間に対して人々が共通に抱く特別な感覚や記憶」や「人々が特定の場で経験を蓄積することにより獲得する生の実質」を指す。空間あるいは場を、歴史・文化・コミュニティの蓄積装置とみなす考え方である。センス・オブ・プレイスの高い空間においては世代を超えて記憶が共有されることが期待されている。近年、歴史的なインフラ資産をセンス・オブ・プレイスの観点から再評価し、地域づくりに役立てようとする試みが広がりつつある。

本研究では、香川県における最も身近なインフラ資産としてのため池に着目する。県内には約14,600ものため池が存在するが、その多くは江戸時代に築造されたものであり、ここに来て老朽化が目立つ。また、産業構造の変化や農業従事者の高齢化によって農業地域での耕作放棄が相次ぎ、当然のことながら不要になったため池の管理は十分なものとは言えない状況にある。歴史的・文化的な遺産としてのため池を次代に残そうと、行政も対策に乗り出しているが、県内にくまなく広がり、地区ごとに性格の異なるため池の保全は容易でない。本研究では、このような困難な状況に置かれたため池の保全・再生の意義をプレイス・メイキングという観点から再考することを目的としている。そのために、ため池の管理をめぐる地域住民の意識とソーシャル・ネットワークの現状、およ

びため池をセンス・オブ・プレイス喚起のための装置として再生するための条件整備について検討を試みる。

2. センス・オブ・プレイスと地域資産との関係

(1) センス・オブ・プレイス

Hay²⁾は、知覚的な領域、情緒的な領域、経験的な領域の3つの領域での帰属意識としてセンス・オブ・プレイスを定義している。Williams and Stewart³⁾は、個人や集団と場所(ローカリティ)との関係を、意味・信念・価値および感情の総体的な結びつきと捉え、場所に関する知識と経験によってセンス・オブ・プレイスが強化されうることを主張している。また、

場所に根ざした教育が地域社会のセンス・オブ・コミュニティを向上させ、歴史文化や自然に関するローカルな知識の共有によって、住民はセンス・オブ・プレイスを高めるための投資の重要性を認識しようとしている。さらに、Curry and McGuire⁴⁾はローカルな知識をscience in 'place'と位置づけ、場所に結びついた知識は、創造性や場所への責任感を高める働きがあることを指摘している。

本稿においては、これらの先行研究の知見に基づき、センス・オブ・プレイスを以下のような要素によって捉えるものとする。

個人や集団にとっての特別な場所であること
場所によって描かれるアイデンティティの存在
場所を通じて家族や友人間に共有される経験
場所に対する深い知識と親しみ
歴史遺産としての位置づけ
場所を管理することの誇り

(2) 地域資産(コミュニティ・アセット)

Kretzmann and McKnight⁵⁾は、ソーシャルキャピタルの重要性を認識し、参加型アプローチとコミュニティ資源の活用によるコミュニティ開発の考え方(Asset-based community development: ABCD)を提案している。その際のアセットには人、物的な構築物、自然環境資源、制度、インフォーマルな組織などが含まれる。この考え方

*キーワード: 計画基礎論, 意識調査分析, 市民参加

**学生員, 香川大学工学部安全システム建設工学科

(〒761-0396 高松市林町2217-20, TEL087-862-2165)

***正会員, 工博, 香川大学工学部安全システム建設工学科

(〒761-0396 高松市林町2217-20, TEL087-862-2165)

****正会員, 博(工) 豊橋技術科学大学建設工学系

(〒441-8580 豊橋市天伯町雲雀ヶ丘1-1)

は、McMillan and Chavis⁶⁾のSense of community概念にも依拠する。Sense of communityとは社会への帰属や他者との関わりについて構成員が抱く感覚・感情、および相互のコミットメントを介してニーズが達成されるという信頼感と定義されるものである。

また、より近年ではコミュニティ・アセットマネジメント (Community Asset Management :CAM) という概念が広がりを見せている。CAM には様々な解釈がなされているが、コミュニティアセットとは、コミュニティによる集約的な利用 (collective use) がなされる資産であり、コミュニティにより共同所有される、あるいはトラストや公的機関によって保有されるものである。CAM はマネジメントのためのキャパシティの向上、ライフタイム・プランニング、パートナーシップによる資産の維持管理を視野に置くものであり、以下のような成果をもたらすことが期待されている。

- 1) 地域の社会・経済的な発展の支援
- 2) 生活の質の向上
- 3) センス・オブ・コミュニティの喚起
- 4) 健全なコミュニティづくり

3. 対象地域と調査の概要

本研究においては、高松市東部の小山池の周辺地域を調査対象として取り上げる。この地域には大きな川がなく、古くからため池の水に頼った生活が営まれている。香川県下の他の農村地域と同様に、農家の数は減少を続け高齢化が目立つことに加え、近年では線引き制度の廃止により住宅開発が進み、新規住民も増加しつつある。農地の減少のため、ため池本来の意義が薄弱化し、同時に個々のため池の管理主体の構成員が減少し、一つのため池に対する農家の負担が大きくなっている。水利組合の高齢化、後継者問題も深刻であり、適切な管理が困難な状況に置かれている。

このような状況の中、近年では管理状態の不良なため池が、台風などの豪雨時に決壊し、地域社会に被害をもたらすことも危惧されている。過去には、台風により裏ずれが起こったことや、地震により堤防に亀裂が入るなどの被害を経験している。

なお、小山池においては、平成11年の県土地改良事業によって小山池公園が造られ、その際水利組合と住民が一致して「小山池公園管理委員会」が組織されている。

本研究では、小山池周辺地域 (5 地区) の住民に対し、「小山池」及びその管理に関わる「小山池公園管理委員会」に関するアンケート調査を実施した。家庭訪問により調査票を 160 部配布し、157 の有効回答を得た。

回答者の属性を見ると、年齢構成については高齢層の割合が相対的に高く、60歳以上が38%を占めている。

また、居住歴については20年以上居住している人の割合が全体の6割に及んでいる。調査項目は、1)地域内のコミュニケーション、2)ため池に関する知識、3)ため池をめぐる被災経験、4)ため池公園を活性化するための方策、4)情報発信組織の有効性等を含むものである。

4. 地域資産としてのため池をめぐる意識とソーシャル・ネットワーク

(1) ため池の機能・役割に関する知識と情報伝達

ため池をめぐる住民の知識に着目すると、「ため池の機能・役割について知っていますか」という質問項目に対し、全体の8割が知っていると回答している。しかし、年代別に見ると30歳以下の若年層では知らない者の割合が圧倒的に高い。また、「その情報をどこから入手しましたか」という質問に対し、全体的には人伝に聞いたという回答が多かった。しかし、年齢階層別に見ると、高齢者層の方は親から聞いたと回答した人が多いのに対し、若年層ではその回答割合は2割強に過ぎず、「新聞・テレビなどのニュースから」との回答割合が8割近くを占める。このことは、親や身内からの地域資産としてのため池に関する伝承が消失しかけていることを示唆している。

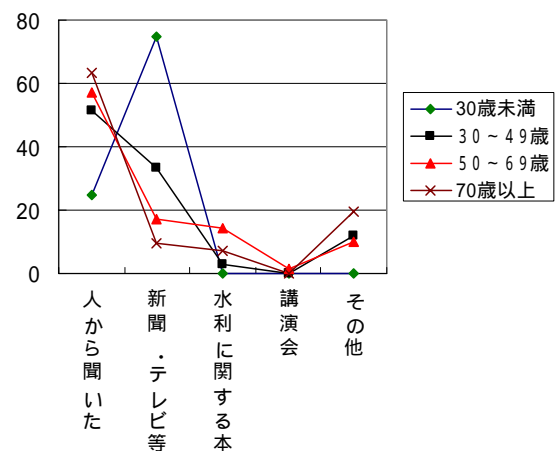


図-1 ため池に関する情報の入手源

(2) 地域の交流

上記の情報伝達の現状は、地域内のソーシャル・ネットワークの有りようにも依存すると考えられる。そこで、個人の交友関係やコミュニケーション頻度を把握した。まず、「近所に友人や知人は多いですか」との質問に対し、全体では「多い」と回答した人が6割を超えるが、若年層ほど少ない傾向が見て取れる。30歳以下の年齢層では「いない」という回答数も相当数見られた。地区ごとに見ると県営植松団地においては知合い・友人が少ないと回答した人が多く、団地内での交流の少なさが目立つ。

「ふだん近所の人とどれくらい話しますか」という質

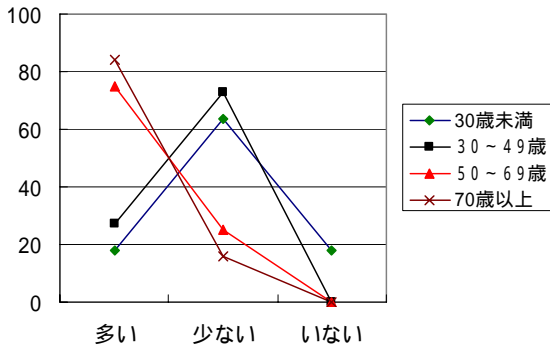


図-2 近隣における友人・知人(ネットワーク)の多さ

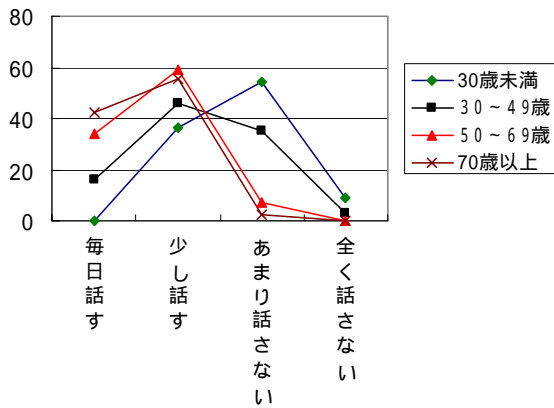


図-3 近隣におけるコミュニケーション頻度

問に対しては、「毎日話す」や「少し話す」と回答した者が全体で8割を超えるが、やはり若年層では「あまり話さない」、「全く話さない」との回答割合が過半数を超え、地域内での交流機会が乏しいことが読み取れる。

(3) ため池管理の仕組みと今後のあり方

「公園管理委員会について知っていますか」という質問に対しては、半数以上の人々が「知らない」と回答している。特に若年層においてはそうした回答が多かった。

「一般の人に公園の使用・管理を促すにはどうすればよいですか」という質問に対しては、「地域参加のイベントを開く」、「幼稚園・小学校などの課外活動の場として公園を使用する」などの回答が多く、どの年齢階層からも支持があった。地区間の比較では、植松団地の住民の半数は「幼稚園・小学校などの課外活動の場として公園を利用する」と回答している。

この「公園管理委員会を中心とした情報発信組織ができたとしてそれを利用しますか」という質問に対し、全体では利用すると回答した被験者が多い。しかし若年層の方たちには「わからない」との回答が多かった。こうした層には公園管理委員会の存在すら知られていない事実を考えれば当然の回答と言えなくもないが、それに

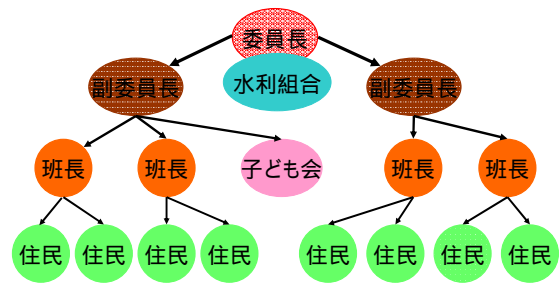


図-4 小山池公園をめぐる既存のネットワーク構造

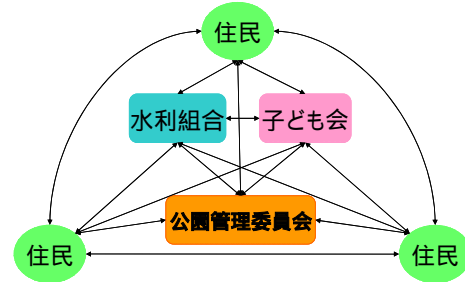


図-5 水平型ネットワークの例

加え、現在の公園の管理組織・体制にも問題があると考えられる。すなわち、現在の組織は図-4に示すような垂直型のネットワークとして形成されている。公園管理委員会は小山池周辺地域の水利組合(水利組合会長が管理委員会の委員長を兼ねる)と2つの自治会(自治会会長が管理委員会の副委員長を兼任)から構成されているが、ため池および公園の管理運営に関わる情報は、委員長から各地域の代表に伝達され、その後住民に届くという仕組みになっている。このような体制においては、ネットワークの下部は上部からの情報を伝達されるだけであり、末端住民は組織自体に興味をもたない可能性が大きい。なお、現行組織においては2つの自治会の間につながりが殆どなく、末端部の住民どうしにも交流はない。水利組合と自治会の住民のつながりも弱いものであった。

5. まとめ プレイス・メイキングに向けた資産の活用

(1) 場所の体験から場所の知識へ

地域内に有機的なソーシャル・ネットワークを生み出すためには、従来の垂直型ネットワークではなく、図-5に例示する水平型ネットワークの形成が有効と考えられる。その際、子ども会をネットワークの結節点に置くことにより、住民どうしのつながりも強化されると期待される。

こうしたネットワーク再構築の試みが、今春、現場で始まった。3月の下旬に水利組合の呼びかけで、小学5・6年生を中心とした子ども会の児童20人が参加した。水利組合の教えのもと、水質浄化のためのEM菌

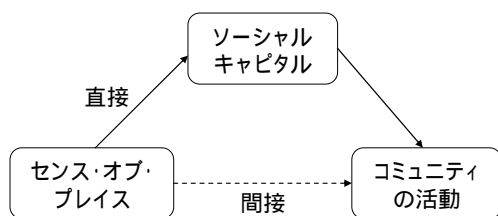


図-6 センス・オブ・プレイスのコミュニティ活動への貢献

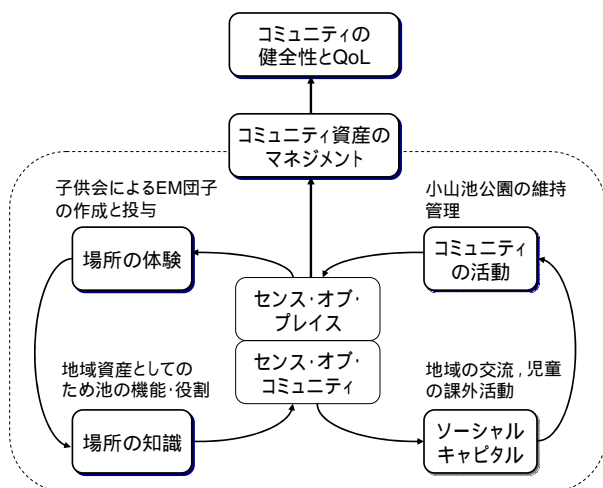


図 7 小山池をめぐるプレイス・メイキングの過程

を団子状にしたものを児童たちが手作りし、4月の初旬に児童ら自身が小山池に投げ入れた。なお、水辺での児童の活動の安全性について、親からの不安の声や反対意見は聞かれず、むしろ児童を積極的に参加させ、ため池に興味を持たせることを心がけているとのことである。

なお、小山池の取り組みは近隣のため池の取り組み『アサザの里・久米池』浄化作戦に影響を受けたものである。この作戦は高松市新田町にある久米池で行われた水質浄化プロジェクトである。同町では急速な都市化の進展により、ため池の汚染、都市と農村の混住化が進みため池機能が低下してきたため、希少植物のアサザ等の水生植物の保護や景観保全を目的とした取り組みが平成13～14年に実施された。この活動でアサザを定植し、余分な栄養分をアサザに吸い取らせる等の取り組みが行われている。児童らは県の環境保健研究センターや久米池水利組合の人等にアサザの植え方を教わり、ため池学習会において、ため池の重要性・機能・役割を学んでいる。

(2) プレイス・メイキングに向けた今後の課題

センス・オブ・プレイスはローカルな場所における体験とそこで得た知識によって強化される。図-6 および図-7に示すように、これと平行して、コミュニティ意識は地域の協働活動やそれを介したソーシャルキャピタルの形成によって強化される。この2つの好循環サイクルによって、コミュニティの健全性や QoL が高められると期待さ

れる。このとき、ソーシャルキャピタルとは、地域のネットワークによってもたらされる規範と信頼であり、地域共通の目的に向けた協働モデルを生み出す源となるものである。プレイス・メイキングにはこの見えざる社会資本 (=ソーシャルキャピタル) が不可欠である。

なお、2節に示した要素に沿い、小山池を対象として本研究で得られたプレイス・メイキングの可能性と課題は、以下のように整理される。

個人や集団にとっての特別な場所であること: これが達成されない限り地域資産のマネジメントは困難であり、この達成手段は や と位置づけられる。

場所によって描かれるアイデンティティの存在: ため池は築造されている地形条件や貯水量、堤長、堤高、満水面積等のため池諸元、周辺土地利用など、同じため池はないといわれているように、ため池そのものがアイデンティティを持つ存在である。にも関わらず単一ため池の場所性を問う場合には、地域住民には気付かれぬことが課題である。久米池ではアサザがアイデンティティ作りに大きな役割を果たしており、小山池でも上述の取り組みがアイデンティティ作りの一翼を担うことが期待される。

場所を通じて家族や友人間に共有される経験: EM 菌団子づくりでようやく始まったばかりであり、今後、積極的に経験を共有できる社会を作ってゆく必要がある。

場所に対する深い知識と親しみ: アンケート結果からは総じて、ため池の機能・役割を知っているが、若年層は知らない人が多い。親しみは知識が増し経験が加わることにより生まれるもので、これからの課題である。

歴史遺産としての位置づけ: のように前提とも考えられるが、歴史性のある遺産としての手掛りが得られるかが鍵を握っている。この面の知識が深まれば、 にとって大きなハズミになるであろう。

場所を管理することの誇り: が達成された後に顕在化すると考えられる。あるいは の達成度を表す評価指標とも位置づけられる。

参考文献

- 1)土井：地域再生と港湾について，港湾 vol.83, pp.12-13, 2006.
- 2)Hay, R.:Taward a Theory of Sense of Place, Trumpeter, 5(4), pp.159-164, 1988.
- 3)Williams and Stewart Sense of place: An elusive concept that is finding a home in ecosystem management. Journal of Forestry, 96(5), pp.18-23, 1998.
- 4)Curry, J.M. and McGuire. S.: Community on Land, Rowman and Littlefield Publishers, 2002
- 5)Kretzmann and McKnight :Asset-Based Community Development Institute, 1993.
- 6)McMillan, D.W. and Chavis, D.M. : Sense of community; A definition and theory, American Journal of Community Psychology,14(1), pp.6-23, 1986.

